

「……楓？」

「そんな、よく知らない女の子の告白なんて、受けないほうがいいよって言いたくて」

「なに、急に……」

楓の言葉の意図がつかめず、間の抜けた声が出た。夜気がひやりと頬を撫でる。街灯の光が楓の横顔に落ちて、場違いにも綺麗だと思ってしまう。

そのとき。

「その子より、僕と付き合って」

「……は？」

時間が止まったみたいに、街の音がずっと引いた。開いた口が塞がらない。楓は視線を外さず、指先だけがカーディガンの裾をぎゅっとつまんでいる。

え、何。どういう状況？

確かに、楓のことはずっと“憧れ”だと思っていた。でも、恋愛の相手として見たことは、一度もない。

他の男や女だったら、きっと舞い上がるくらい嬉しいシチュエーション。でも……。

「……悪い、楓。俺は……お前と付き合えない」

喉の奥がつまる感覚を押し込んで、正直に、はっきりと言った。

「楓はすごくかわいいと思う。みんなのアイドルだし……でも俺、期待に応えられるような男じゃない」

楓はきっと、俺に愛されることを望んでいる。王子様みたいにエスコートして、守ってあげてくれることを。でも俺には、それをやりきる自信がない。過去に付き合った人とも、結局はそれが原因で続かなかった。勝手に理想を押し付けられ、勝手に失望されるのは、もう御免だ。

なのに。そんな俺に、楓まで王子であることを期待している。そう思った瞬間、胸の内側で、支えていた何かが、パキッ、と音を立てて折れた。

ああ、もう。誰の期待にも、応えたくない。

「みつは、何か勘違いしてる」

不意に、楓の手が俺の手を握った。さっきまで少し離れていたのに、いつの間にか、その綺麗な顔が目の前にあって息をのむ。

スラリと綺麗な白い指。キラキラ輝く爪先。華奢な見た目に反して、俺の手を握る力は驚くほど強い。

「……楓……？」

触れられた場所が、じんわり熱を帯びる。まるで世界に俺と楓だけになったみたいだった。

楓がゆっくりと顔を寄せ、耳元で囁いた。

「みつが無理して周りに合わせてるのも、本当は愛されたがってるのも……僕、ずっと見てたよ」

「……え？」

息が、止まった。心臓が喉までせり上がってくるような衝撃。どうして、俺が一番奥にしまい込んで誰にも見せなかった願いを、こいつが。

目の前の楓の顔から、人懐っこい笑みは消えていた。そこにいるのは、かわいい「姫」じゃない。いつになく真剣な目つき。熱を帯びてまっすぐに俺を射抜いている。

「僕は、他の人とは違うよ。みつのこと、かわいがりたい。抱きたいて思っているんだけど、ダメかな？」

「なっ……」

楓の口から飛び出したあまりに直接的な言葉に、反射的に身を引こうとした。だけど、引けなかった。逃がさないと言うみたいに、楓の指が俺の指に強く絡みつく。

「僕なら、みつのこと、ぐずぐずに甘やかして、大切にする自信がある」

いつもの舌ったらずとは違う、わずかに低い声。鼓膜の内側を撫でるみたいな甘さに、背筋がぞくりと震えた。

怖いのか。期待してるのか。自分でも分からない。

「僕に……愛されてみない？」

「……」

どうしよう。

「はあ、ん……っは……」

全身が蕩けるように力が抜け、気づけば俺は、楓によって真っ白なシーツに押し倒されていた。

「おっぱいだけでこんなぐずぐずになっちゃって……。みつ、すごく才能あるよ！ 本当にはじめて？」

(……どんな才能だよ)

無神経な態度に悪態をつきたかったけれど、荒く呼吸するしかできない。潤んだ目で、楓を睨みつけるのが精一杯だった。

(なんか、すげー疲れた)

キスされて、胸を好き勝手舐られて。ただそれだけなのに、刺激が強すぎて、もうキャパオーバーだ。

俺が夢見てた「愛される」って、もっとお姫様みたいに、ふわふわ甘やかされるやつだったのに。こんなに恥ずかしくて、全部を曝け出さないといけないわけ？ 女の子って、こんなに大変だったんだな……。

というか、もう寝たい。頼むから、寝かせてくれないかな。

そう、思ったのに。

「あれ、大変！ みつのここ、泣いてるよ……」

「は、え？ ちょ……っ、あ！」

楓の人差し指が、胸への刺激で張り詰めていた熱い昂りを、スリ、と撫であげた。先走りがねとお……と糸を引き、白く細い指に絡みつく。その光景があまりに卑猥で、頭が沸騰しそうだ。

「あら、泣き止まないね？ よし♡ よし♡ してあげなきゃ……」

気づけば楓は、俺の足の間に身体を滑り込ませ、膝を割り開いていた。熱を帯びた吐息が、敏感な中心に降りかかる。小さな子どもに話しかけるような甘い口ぶり。それが余計に、俺の羞恥心を煽り立てる。

「あ、楓っ、ちょっと待……っ！」

制止の言葉は、最後まで紡がせてもらえない。言い終える前に、熱く濡れた粘膜が先端をじゅるり、と包み込んだ。

「っひ……！」

震えるほどの快感に、必死で口元を手で塞いだけれど、無駄だった。舌先が鈴口を割り、執拗に転がされるたびに、甘い痺れが腰の奥に蓄積されていく。

（え、俺……コイツにフェラされてんの……？）

数時間前までは、ただの友達だったのに。今はそいつに、フェラされている。この異常な状況に、理解が追いつかない。

「……んっ、ふ……っ、う……！」

（だめ、こんなの……ちんこ、溶ける……っ！）

こういうことは過去に何度か、彼女にしてもらったことはある。だけど、生理的な涙が滲むほど強烈なのは、生まれて初めてだった。同じ男同士、身体の構造を知り尽くしているからこそ。悔しいけれど、気持ちいいところを的確に、容赦なく攻めてくる。

楓は唇を離さず、舌で形を確かめるみたいにくびれを這い、裏筋を下から上に、アイスクャンディを食べるみたいに卑猥な音を立ててゆっくりと舐め上げる。

「なあ、楓っ……も、出る、出ちまうから、離せよ……っ」

息も絶え絶えに訴えると、楓は一度口を離し、目を合わせた。

「ん？ いいよ、このまま出して」

「はっ……？」

「僕の口に、全部ちょうだい？」

あまりにあっけらかんとした言葉に、頭が真っ白になる。いくら何でも、友達の口に出すとか恥ずかしすぎて、死ぬ。いろいろ終わる……！

なんとか腰を引いて抵抗を試みたけれど、無駄だった。楓の口内の熱と、吸い付くような舌の動きに脳が溶かされ、もう頭の中が射精することしか考えられない。

快感の大波が押し寄せて、俺は縋るように、楓の綿毛みたいにふわふわした髪を鷲掴みにした。それでも楓は、一向に口を離してはくれない。

「やだ、楓っ、それ、やばいから……っ！ お願い……」

「……ん、いーよ、だひて」

じゅるっ……じゅぽっ、じゅるるっ♡♡

含んだまま発せられた、くぐもった声。直後、裏筋を抉るように刺激され、先端を強く、真空になるほど吸い上げられた。

「……んっ、あ、ああっ！」

そんな俺の怯えた様子を見て、楓は面白そうに喉を鳴らして笑った。

「ふふ。みつが処女だってことは、よくわかりました♡」

「おま……っ」

「僕のこと無理やりセックスする酷い男だと思った？ そんなことしないってば。だから、ね？ 泣かないで♡」

「んっ……」

ちゅるり♡ と、楓が顔を寄せ、俺の頬を伝う雫を舐めとった。たったそれだけの刺激にも、ビクンと反応して声が出てしまう自分が恥ずかしい。楓に指摘されて初めて、自分が泣いていることに気づいた。

恐怖なのか、キャパオーバーなのか。めちゃくちゃに翻弄されて、情けなくて。穴があったら入りたいって、本気で思った。

（……俺の穴は、今まさに狙われてるけど！）

「今日は、『ここ』で気持ちよくなろうね？」

楓は開いた足の間に、滑り込むように身体を沈めた。そして凶器レベルのペニスを、俺のそれにずっしりと押し当てる。

「んあっ……！」

触れ合う感触は、まるでキスをされているかのように熱くて、甘い。突きつけられる、圧倒的な「オス」。まざまざと、格の違いを見せつけられている状況だ。

普通だったら、男として屈辱的な状況でしかないはずなのに……。なぜか心が嬉しいと、高鳴ってしまっている♡

俗にいう、兜合わせってやつだ。重なり合った二つの熱。剛直な塊が、ゆっくりと擦り上げられた。

ちゅこ、くちゅ……くちゅっ♡

「っん！……あ、あっ！　だ、め！　あちゅ、擦れるう……」

敏感な裏筋が、楓の血管が浮き出たゴツゴツした表面に、グリグリと容赦なく擦り付けられる。摩擦熱で、そこから火がつきそう。燃え上がるような快感に、頭の芯まで溺れそうになる。

ごりゅ、ぬちゅっ♡　ちゅぽ、ぐちゅり……♡♡

互いのかり首のくびれを、むちゅむちゅ♡　と押し付け合い、擦り上げる。溢れ出した先走りで次第にネチヨネチヨと卑猥な糸を引き、逃げ場のない熱が身体の奥底に溜まっていく。

「ふふ。いっぱい擦れて気持ちいいね。お顔めっちゃとろけてきた♡　かーわい♡」

不意に、熱っぽい視線が俺を射抜く。耳元で囁かれる、蕩けるような甘い言葉。

（……え、俺に言ってるの？）

「か、かわいいの？　俺……」

「ん？　みつ以外に誰がいるの？」

「いや俺、目つき悪いし、背も高くてゴツいし、かわいくないだろ……男、だし」

言い訳するように、自分のコンプレックスを並べ立てる。お姫様みたいになりたかったけど、なれなかった理由たち。けれど楓は、そんな俺の言葉をひとつずつ、甘いキスで塗り替えていく。

「そうかな？ 涼しげな目元も、涙でキラキラして綺麗だし」

チュ、と。快感の涙を溜めた目尻に、優しいキスが落ちる。

「背の高さなんて、ベッドに横になっちゃえば気にならないよ？」

今度は、汗でしっとりと濡れている頭のとっぺんに、甘ったるいキス。

「それに、引き締まったカッコいい身体もさ」

「あっ……」

次は、散々いじめられた乳首にキス。やばい、どんどん高められていく……♡

「今は真っ赤になって、えっちなこと頑張ってくれてる……。そんなみつは、すごくかわいいよ」

「はう……♡」

「あとは……性別は、関係ないかな」

耳元で囁かれる。脳に直接響かせるような、甘く低い声。

「みつが男の子じゃなかったら、僕ら、出会ってなかったかもしれないでしょ？」

それにね、と楓は続ける。

「いつもスマートに振る舞っているけれど、本当は頑張り屋さんで、不器用で……そんなところがとっても、かわいい。かわいいよ♡」

言葉だけじゃ足りない、とでも言うように。とどめの深い口づけが落とされた。

(かわいい.....♡)

かわいって、言ってもらえた.....！ずっと欲しかった、その言葉を。

それを合図に、俺は真っ逆さまに快感へ堕ちた。

「ああ”！！♡ うあああっ♡.....いぐっ♡ イ”ったう！！
♡♡」

びゅるっ！♡ びゅく♡♡ びゅ.....っ、どびゅ♡♡

ガクン♡ ガクンっ♡ と尻がベッドから浮いてしまうほど、腰が大きく痙攣する。どうしようもない快感に突き動かされ、楓の怒張に自分のちんこを擦り付けながら、俺は盛大に欲を吐き出した。

視界が白く飛び、何も考えられない♡

「あら.....みつ、かわいって言われてイっちゃった？」
「あ.....あひ.....♡♡」
「おしゃべりできないくらい気持ちいいんだ♡」

遠くから、楽しげな楓の声が降ってくる。

射精の余韻で、身体はまだビクビクと無様に跳ねている。心臓は、マラソンを全力疾走した直後みたいに、痛くらい早鐘を打っていた。頭が真っ白で、犯してしまった痴態の言い訳が何ひとつ思いつかない。致命的な疲労が一気に押し寄せ、泥のような眠りに落ちそうになる。

なのに。

「みつ、ごめん。後少し頑張って……っ」

「ツッん”っ！！？ やっ！？♡♡ まっ、で！！ 止めでええっっ♡♡♡」

ぢゅこっ、ぐちゅ♡ ぐちゅ♡♡ ぬちよ♡♡♡

イッたばかりの敏感すぎるちんこに、再び強烈な刺激が走る♡♡
しかも今度は、楓自身がイクための、気遣いゼロの一方的なストローク♡

混ざり合った互いの白濁は、激しい摩擦でメレンゲ状に泡立ち始めていた。視覚的にも、ぐちょぐちょと響く音的にも、どうしてもなく卑猥だ。

同じ男なら。射精した直後のそこを虐められたら、どれだけ辛い
か分かるはずなのに……っ♡♡

楓は愛らしい顔を快感に歪めながら性急に高みへと上り詰めていく♡

「ツッ！？あ”あ♡ だめっ、イぐう♡♡♡ んああ”っっ！！♡♡♡」

びゅるっ♡ びゅく、びゅくっ♡♡♡

抵抗なんてできるはずがない。2度目の射精は、情けないくらいあっけなく、早すぎるフィニッシュを迎えた。

全身にもう、力が入らない♡ ぴく♡ ぴく♡ と、壊れた玩具みたいに身体を震わせていると。少し遅れて、楓が絶頂を迎えた。

「くっ……出る、っ」